

2012 年度第1回評価・標準化研究会議事要旨

日時：平成25年5月14日(火)15:30-17:30

場所：株式会社 NTT データ 豊洲センタービル 会議室

出席者：飯倉・岩崎・沖・田殿・筒井

議事

1. 幾何補正・大気補正に関する検討結果のレビュー

飯倉会長就任以降、2001年からの、当研究会における幾何補正・大気補正を中心とした衛星データ解析技術の標準化活動の経緯と概要に関する説明があった。検討の初期においては、陸域リモートセンシングを用いて定量的な情報抽出を行うステップが体系化され、より多くのユーザが利用するためには「衛星データの位置に関する幾何補正」および「衛星データの値に関する輝度補正」を標準化する重要性が整理された。2005年からは、高分解能衛星画像の幾何補正、商用ソフトウェアの幾何補正機能、ASTER・LANDSAT データの簡便な幾何補正手法および精度評価方法等の光学データの幾何補正に関する研究会を複数回開催し、検討が進められてきた。2009年には、SARデータの幾何補正に関する研究会を開催し、PALSARの精密幾何補正および簡便な幾何補正の発表が行われ、光学に比べると一般的ではない SAR の幾何補正に関して検討された。これらの成果は整理されて、学術講演会や学会便りを通じて、学会員に報告されてきた。2011年からは、幾何補正の技術課題はほぼ整理されたと判断し、大気補正に主軸を移して検討が進められてきた。「衛星データの大気補正の理論である放射伝達モデル、簡便な放射輝度補正方法、放射伝達モデルのパラメータ取得のためのセンサネットワーク」に関して研究会を開催して検討を進めてきた。今後は、反射率プロダクトを標準的に生成するための仕組みについて検討する必要があると総括された。

本レビューについて、参加者により関連する話題提供、および活発な質疑、議論が交わされた。その中では、最近、NASAにより打ち上げられた LDCM(LANDSAT-8)の各種補正システムについて詳細を検討する必要性が指摘された。LDCMにおいて、オルソ補正データは GCP により品質評価された結果がプロダクトに添付されている。また、MODIS を用いた応用解析(河川流出推定)の例では、低輝度の水域を用いた簡便な輝度補正により、解析精度が安定して得られている。これらの内容から、今後の研究会の検討課題の方向性として、地上観測情報を入れシステム化された各種プロダクト補正の評価・標準化の仕組みを検討する必要があることが確認された。

2. 平成25年度の研究会の進め方について

飯倉会長から新体制への移行(研究会会長の交代および幹事交代)が提案され、承認された。新会長には、飯倉会長から沖氏が推薦され、承認された。また、幹事に関しては、沖氏に一任することが併せて承認され、新幹事が決まり次第に、新体制へ移行を行う。

今後の研究会活動としては、衛星データの物理量変換を引き続きに主要課題として検討を進めていくこととし、特に、地上観測情報を組み合わせシステム化された輝度補正・評価方法の標準化を検討していく方向性が示された。

以上